ることに伴って，新メンバーの人選基準について議論された．ACSYSの対象分野・領域の拡大が必須となっている点を踏まえて，以下の研究領域を考慮した人選を行うこととなった；氷床，海洋（モデル，素過程，地域，化学），GCM，リモートセンシング，大気・陸域相互作用，雪，大気化学，海氷過程，接地境界層，南極域）．今回は，人名のリストアップはせずに，早急にAagaard議長宛に候補者の推薦することとなった．また，改選に合わせて副議長を新設することが決定した．

11. 会議に参加しての印象

気候変動研究にとって北極研究の重要性は皆が認めるであろうし，WCRPとしてもわざわざ1つのプロジェクトとして推進している．しかし，その実行には中低緯度には無い多くの困難が存在している．例えば，北極海は夏でも厚い多年氷でその大部分が覆われていること，各国の領土領海内での観測であること，特に政治的，社会的混乱状態にあるロシア抜きにはなにも進まないこと等々．このような厄介な状況の下でも北極研究をやろうとする物好きが多くいるのは心強い．

会議の進め方で気になったのは，議長が議論の成り行きにまかせ議事進行を制御しようとしない点と，議案の事前調整や根回しがなされていない事である．Aagaard議長の性格なのかSSGの方針なのかは分からなかったが，議論が迷走したり言いっぱなしで終わったりする事が目についた．例えば，実行計画の見直しの議論では原案が示されて論議が行われ，決着がつきそうに思われたときに，突然G. V. Alekseev（ロシア）が修正案を持ち出し，話が振り出しに戻ってしまった．また，第2回ACSYS—Conferenceでは，昨年のSSGでシアトルと言う案が出ているので，すんなり事務局案が出て決まりそうに思えたが，先に述べたようにあれこれ意見が出された上，結局シアトルに決まった次第である．これが，欧米流のやり方であろうか？とにかく，朝8時半から夕方6時過ぎまで，午前午後のコーヒーブレイクと1時間の昼食を除き，延々と議論する4日間のロングラン会議であった．特に，最終日は土曜日であり，欧米人が土曜日も働くとは思っていなかったので，事実上金曜日で終わると期待していたが見事に裏切られた．

参考文献

住　明正，1996：JSC-17報告，天気，**43**, 709-710.
WCRP, 1994：Arctic Climate System Study (ACSYS) Initial Implementation Plan, WCRP-85, WMO/TD-No. 627, 66pp.

情報 File

第29回（平成10年度）三菱財団自然科学研究助成応募要領

1．**重点対象分野（10分野）**
　(1) 自然科学分野における新しい現象を模索する理論あるいは実験研究
　(4) 地球規模の環境に関する基礎研究

2．**応募資格**
　原則として個人研究（但し少数グループによる研究も含む）

3．**助成金額**：1件2千万円以内
　比較的少額のものも考慮

4．**助成期間**：原則1年

5．**応募締切**：平成10年2月20日（金）
　詳細は気象学会事務局へ
　TEL：03-3212-8341（内2547）
　FAX：03-3216-4401